

361

時事靜觀

特 250

724

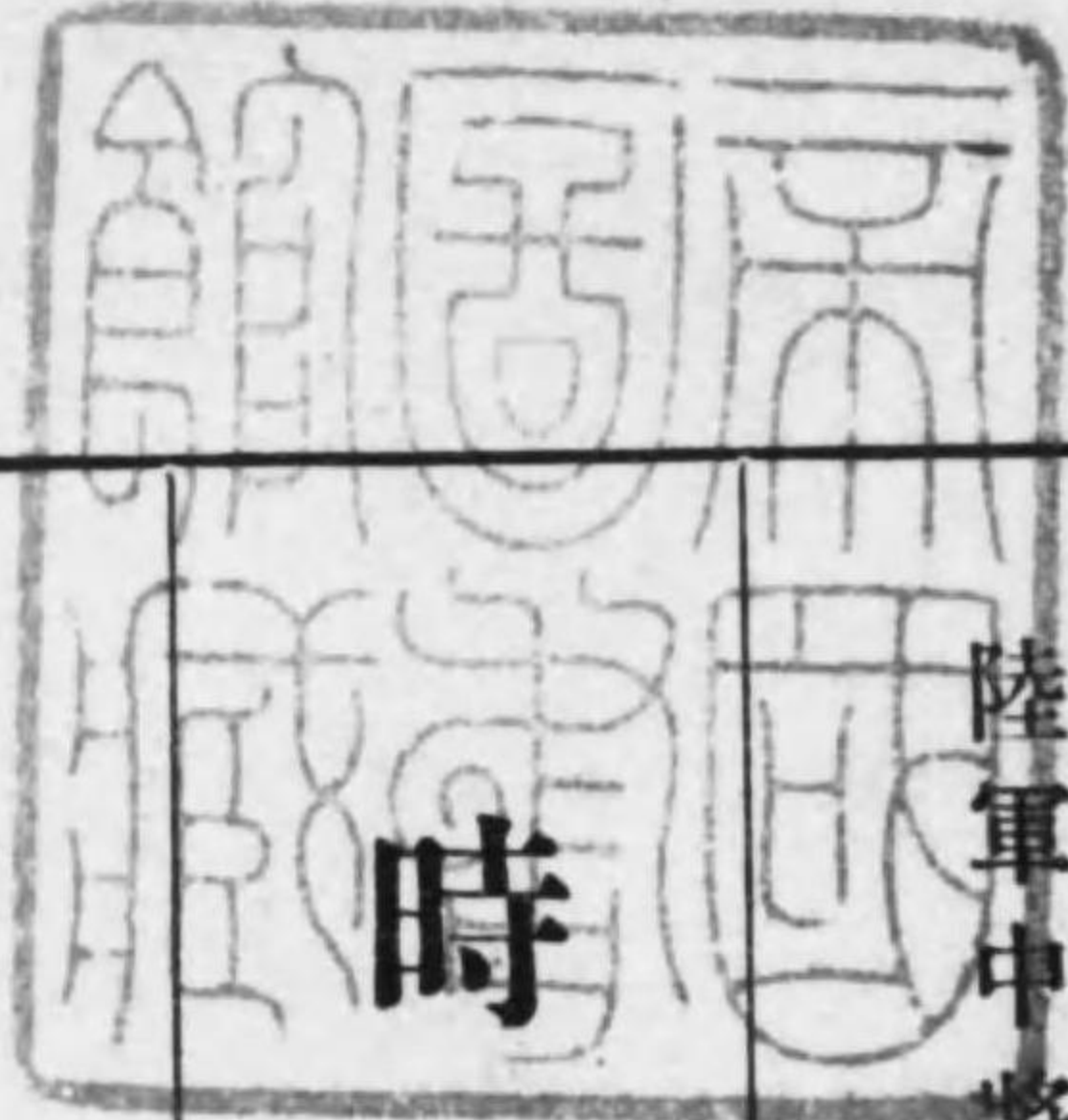
中將鈴木一馬述



始



特250
724



陸軍中將鈴木一馬述

時
事
靜
觀

東邦事情研究書院版



時事靜觀 目次

第一章	滿洲國に對する所感 ……………(一)
第一節	赤裸々の滿蒙……………(一)
第二節	我が滿蒙移民計畫私案……………(六)
第三節	我が滿蒙事業の完成に就て私案……………(八)
第二章	對支問題に關する所感 ……………(一〇)
第一節	日支親善の復舊に就て……………(一〇)
第二節	日支兩國の共存共榮を論じて兩國の人士に望む……………(一三)
第三節	故孫文氏の抱懐せる日支提携論を噫ふ……………(一七)
第四節	日支兩國の親善の基礎は相互に其國民性を理解するにあり……………(二五)
第三章	我が外交に關する所感 ……………(二六)

頁	行	正	誤
二	六	粟が	粟が
五	二	滿洲人	滿洲國
八	四	拾年間	拾年間
三	三	徹底	徹底
一五	二	蘇國	蘇國
一六	四	到底	到底
三	一〇	thuker wntar	thuker wntar
三	六	民族	民族
四〇	二	夫はごう	夫はごら
四三	二	六千噸以上の	六千噸以上の
四三	一	狀勢にある	狀勢に於ける
四三	二	擴張に就て	擴張にて就て

第一節 我が國の外交に就て……………(一六)

第二節 我が外交官の配置に就て……………(一八)

第三節 我が國民の外交觀念に就て……………(三〇)

第四節 我が國民の外交的訓練に就て……………(三二)

第四章 我が國防に關する所感……………(四〇)

第一節 海軍比率問題に就て……………(四〇)

第二節 我が陸軍の兵力に就て……………(四一)

第三節 歐米軍が我が領土若くは滿洲國に上陸作戰を企圖し得るや……………(四三)

第四節 我が海軍力に就て……………(四三)

第五節 我が空軍の大擴張に就て……………(四三)

第六節 戰時航空要員養成機關設備に關する私案……………(四五)

第七節 我が軍資は各國軍を向ふに廻して數年間戰爭を繼續し得るや……………(四六)

第八節 我が國防と滿洲國三千萬民衆の向背……………(四七)

時事靜觀

第一章 滿洲國に對する所感

第一節 赤裸々の滿蒙

我が國民は滿洲事件以來、滿洲に行きさへすれば金が儲かると思ふて、輕卒に旅費文を作つて行くものが少くなかつた。之等は誠に誤つた考であつて我が官憲でも毎々大に困つた事であつたと聞くが、今以て此間違つた考を持つて居るものあるを耳にせるが故に、聊か遅ればせながら赤裸々の滿蒙に就て若干述べて參考に供し度思ふ。

先づ第一に滿洲の物資に就てであるが、其開發の狀況は如何であるかと述べて見れば、概要次の如きものである事を知られたい。

即ち之を若干數へ舉げて見るならば、先づ人類の生活に最も必要欠くべからざる所の殊に最近に於ては化學工業に最も需用多き鹽が大陸の乾燥せる空氣の爲關東洲及其東方海岸に於て夥しく

生産して我等も亦其供給を受けて居るのである。次には燃料たる石炭であるが、之又撫順、新邱烟臺、本溪湖其他北鮮に近接せる吉林省の一部等に中々多量の石炭を埋藏して居るのである。以上の他マグネサイトが數百億噸鐵礦が貧礦なれとも數億噸重油の原料たるべき頁岩が撫順に數十億噸ありと云はれて居り、此他アルミニウム、銅、及豊富なる砂金、金礦等が各所に散在して居る。

又農産物に就て調べて見れば、現在の處特産大豆は約四千萬石、粟が約三千万石、高粱が約四千万石、玉黍黍が約一千二百萬石、其他雜穀が約二千萬石餘を産し將來農民の増加と共に遂次其産額を増加する譯となるのである。

尙此外に畜産事業も將來益々發達の見込ありて、毛皮の如きは世界三大産地の一に數へられて居るのであつて、目下の處でも牛の百五十萬頭馬の二百五十萬頭、羊の二百六十萬頭と云ふが如き多數の畜産を數ふるのである。

更に又林産方面に調査を進めて見れば、未だ古人跡至らざる部分多く精密の調査は今後數十年を要するのであつて、目下都市に近き處若くは鐵路沿線の外は飛行機にて低空飛行を以て偵察せし位の程度であるものと知られたい。而して滿洲國の總面積の貳割五分が森林面積であつて、

其森林の蓄積は概略針葉樹參拾億萬石闊葉樹が六十億萬石と稱せられてある。

其他將來は羊毛、駱駝毛、獸皮、獸骨等も夥しき産額に上るものと想像せらるゝのである。

以上數へ來れば滿蒙の地は物資頗る豊富であつて、寶庫には相違ないけれども、今迄の開發の状況を以て見れば中々濡手で粟をつかむ様な甘い事はなく、何としても之から大に奮闘努力により開發を計るのなければならぬのである。

之を事實の上に照して見るなれば、鹽の如き石炭の如き我が國が關東洲を露國より繼承して以來、三十年の努力により今や相當の産額を見るに至つたのである。又鞍山の貧鐵處理の如きも滿鐵が多大の經費を投して研究したる結果に基くのである。

又農産にした處で蓄産にした處で今後諸般の改良進歩を圖りて始めて大なる收益を得る事となる譯であつて、從來の儘では蒙古の牛皮の薄き事やら其又肉の味が野獸の臭を帯びある事やら、或は羊毛の如き適當に濠洲産と交配して其品種を向上する事やら數へ來れば、悉く改良の爲努力すべきもののみであつて中々右から左へ直に儲を見ると云ふ様な譯には行かぬのである。

以上の外滿洲の商賣としては元々三千万民衆の八割は漢民族にして、往年河北、山東、山西等より出稼に來りたるものが産をなしたのであるから、其購買力と云ふものは極めて少く逆も此處

三、五年の内に其購買力が増加するものとは思はれぬ。要するに現時に於て物心の付きある兒女等が漸次文明の空氣に浴して成長し、之等が青年の時期に到達したる時頃よりでなければ我が國より滿洲に對する雜貨其他の輸出額が激増するものではない。試に最近の調査によりて見るに我が國より當今に於て事件前より對滿普通商品輸出額がどれ丈増加しあるやと聞いて見れば、僅か八千萬圓内外の増加に止まると云ふ。而して我が國民が事件以來幾何の内地移住者ありしやを調べて見れば、今や約拾參萬五千人位從來より増加せしが如く、而して此等の移住民一人として高粱飯を食して居るものもなし、皆白い飯を食し日本の酒を飲んで居るのであるから中々入費が多くかゝるから、上下平均して一人當り年に金五百圓位を消費するものとせば大約其總高が金六千五百萬圓となり、恰も此等移住者が増加せる爲にのみ對滿普通商品の輸出額が大體増加した譯となるのである事が知れよふ。従つて三千萬民衆其ものには未だ大なる購買力がなき事が克明するであらう。

之を要するに滿蒙に對しては目下の處は我が國よりどんぐり資金を投資して之を開發し且つ文明の空氣に浴せしめて、改良進歩を圖り行くによりて早くも四半世紀（貳拾五年）の後に於て始めて我が國の爲に完全なる原料國たり市場たり得べく、夫迄は殆んどつき込むと云ふより外に大

なる期待を持つ事は出来んのであると思ふ。尙又此處に我が朝野の要人並に商工業者諸君に警告したき事は、前述の如く目今我が國より滿洲に投資する資金の大分は將來の重輕工業若くは建設の爲に消費せらるべきものにして其約三分の一は支那労働者の懐に入り、之が年々支那本土に流入するものたることを知られたい。故に此等を回收せん爲には須く支那下級民の實際の生活に使用せらるゝ廉價なる商品をどしどし支那に送り、以て對支貿易を大に發展せしめて滿洲より支那本土に流れ込む所の金を我が國に還元せしむるの策を取らねばならぬのであるが、今日の如き對支貿易の不振なる状態に於ては、我が國より滿洲に投資せる金力の大部は出て行く丈で還つて來ぬのである事を覺られたいと思ふ。

又序に述べたき事は滿洲に行つて何等か仕事に従事して居る人々でも、大概は共喰ひ商賣であつて、而かも日常の費用中殊に酒色に消費する金錢が大部分を占める爲、必しも貯蓄などを見る事が出来ず、日本人は段々と疲弊して滿洲國のみ段々と肥つて行く様に思はるゝのである事に氣づかれないと思ふ。

其他滿洲に行つて居る我が國民は兎角頭が高過ぎて、滿洲國は我等が作つてやつたんであると云ふ様な顔をして段々三千萬民衆より忌憚せらるゝの感あるは最も遺憾とする所であるのみならず

我が國防上頗る危険とせねばならぬ。目下我が國は聯盟を脱退して迄も滿洲國を支持して居る事により大に彼等の感謝を受けべき筈なるに、之と反對の結果を見るに及びそろ／＼他國から滿洲が承認せらるゝに至れば、如何なる老獪なる國が顯はれて來て、彼等を抱き込むやも知るべからずと思ふ時に、或は俚言に所謂鳶に油あげをさらはれたるが如き事が起りはしないかよく／＼心しなくてはならぬと思ふのである。況んや前述の如く滿洲三千萬民衆の八割は漢民族にして彼等の親屬は支那本土にありて日本にあるのではないから、西洋の偶語に血は水よりも濃しと云ふ事があるが、之が實現せらるゝの公算は頗る多い事を知らねばならぬ。

第二節 我が滿蒙移民計画私案

最近世界的の不景氣の影響は國民生活の壓迫を招來し、自然的に將來に於ける人口増加率は往年に比し、逐年減少の傾を呈するに至るが如く想察し得るに難からず、是を以て見る時は我が人口増加率の如きも今後は若干遞減して五十年間を平均するならば、其増加率は總人口の5%以上を昇る事なかるへしと思ふものである。果して然らば帝國の總人口壹億萬人（内地七千五百萬人）に對し毎年五十萬人（内地三十七萬五千人）の増加と見る譯となりて、此等を如何に

各方面に分配移住せしむべきやを検討せねばならぬのであるが、予の考では内地人六萬貳千五百人を北海道、樺太及東北地方に、更に六萬貳千五百人を南洋と南米に（主として蘭領印度）に移住せしむるの方策を採り、殘三十七萬五千人（内地貳拾五萬人）は之を大陸の地に移住せしむるを要すると思ふ。而して今之を細別せば左の如くなるのである。

一、鮮農民參拾貳萬五千人（内朝鮮にて自然増加せし拾貳萬五千人を含む）を滿蒙の地に移し、其の代りに内地より自然増加せし貳拾萬人（農民）を朝鮮に移住せしむ。

二、内地商工漁民五萬人を滿蒙の地に移住せしむ。

斯くて鮮農民に對し一名平均（大人小人）五十圓を補助するものとして壹千六百貳拾五萬圓を要すべく、之は滿鐵より同會社の政府持株に對する利益金を以て充當するを至當とすべく、又内地より朝鮮及び滿蒙に移住すべき貳拾五萬人に對しては國庫より一名平均（大人小人）五十圓を補助するとして壹千貳百五十萬圓を支出するを要すべきも其内半部は其移民の所屬府縣より支出せしむるの方法も決して不可能にあらざるべきものと思ふのである。以上の外此等移民を指導すべき機關として當然存立するを要すべき移民會社等に對しては、政府より年々相當の補助をなすを要すべきであると思ふ。

第三節 我が滿蒙事業の完成に就て私案

滿洲國の領土は極めて廣く我が領土の貳倍以上を有す。従つて此が開發に付ては長年月を要するものと思はねばならぬ。恐らく今後五拾年の後ならでは事業の完成を見る事不可能であらう最を以て考ふるに予は左の如き計畫を以て進むのが適當ではあるまいかと思ふのである。

第一時期 (滿洲國建設せられより拾年間)

此時期に於ては中老が從來の研究と體驗とにより滿洲國に如何なる事業を起すべきやを検討して之が堅實なる事業の端緒を開くに在り。

第二時期 (第一時期を含む) (貳拾五年間)

此時期に於て參拾歳以上の壯年者が致々として中老達に開發せられたる各事業の基礎を確立すべき最善の努力を拂ふに在り。

第三時期 (第二時期後の貳) (拾五年間)

此時期に於ては第二時期に於て確立せられたる事業の基礎の上に目下の青年達が奮闘努力以て事業の完成を期すべきものとす。

之を要するに滿蒙の事業完成には五十年計畫を以て進む如く計畫實施するを要すべきものにして、夫の濡手で粟をつかむが如き考にては到底事業の完成を期する事能はず、之を簡單に述べれば現下の中老連は問題を検討して、之が端緒を開き壯年者は之により事業の基礎を築き上げ、而して青年者が其基礎の上に本建築をなすの氣持を以て進む事が適當なりと認むるのである。

第二章 對支問題に關する所感

第一節 日支親善の復舊に就て

我が國民は過去三、四十年間婦女子に至るまで中華民國人を劣等視して、常に優越感を以て彼等をいやしめ、特に其民國より選拔せられて我が國に留學せる學生等に對しても侮蔑的態度を以て遇したる事が、大にしては對支政策、小にしては對支個人策を誤らしめ、遂に兩國民間に段々と深い溝を穿ち來りたる事は甚だ遺憾とする所である。

然る所近年に至つて我が國民も大に覺悟する所があつて、人毎に日支共存共榮を叫ぶ様になつた事は洵に喜ぶべき現象であつた處、昭和六年九月十八日滿洲事件に端を發してから又々日支相親むの感情が疎隔するの狀況を呈したのは寔に遺憾とする處である。

民國要人の一部の人士は曰く、日本人は今や頻りに日支親善、中日共存共榮を叫ぶのであるが我等中國人の如き自給自足の出來る國民には其の必要を認めぬ、うっかりして居ると朝鮮の二の舞を喰ふてはならぬ、滿洲事件や北支事件は其端緒である、などと警句を發するものあるを耳に

するが、何故如斯事を云はしむるに至つたかと云ふに、最近に至る迄兎角其の仕向方に不親切なる點があつたり、時には正義の下にやつた事が野心を抱藏しあるが如く疑はれる様な下手なやり方をした事もあり、又我が要人中には彼等に對して非紳士的と思はる、行爲があつたり、或は彼等に對し弱點を作つたりした事が重なつて來て種々なる惡口を云はしめ、之等が段々と侮蔑的態度を増長せしむるに至つたものと思ふのである。

又一般日本人の民國に入込み居るもの、なし居る處を見るに、隨分愆張りの者が多く、支那人に對する利益の分配は比較的少きやうのやり方である様に見聞するのである。

元來他の國に入込んで仕事をなすに當り少しは遠慮がなくてはならぬが、我國人の多くのものは實に支那に於ては優越感に基して無遠慮極まる様に見受けらるゝ。

我輩の考へでは支那に於て支那に産する品物に就て商賣をするならば、民國人に六分、日本人に四分利益を見ればよい位の心持で行かねばならぬと思ふ。

而して實に民國は廣いのであるから、其數量に就ていふて見れば何でも夥しき數に上るのであるから、其量の上に就て確實なる澤山の利益を積むと云ふ覺悟が必要であると思ふ。

又日本にて産する物産或は加工品を民國に持つて行つて商賣するならば、當然前と反對に日本

人に六分、支那人に四分の利益を領つと云ふ様なやり方で、所謂相互に麥飯主義で行つたならば排日など受ける譯は此方面からは絶対に起らないと思ふのである。

又將來我が人口が年々増加するに従つて、大陸の各方面に對して逐次集團的移住をなすの外國内に於ては、益々商工業の發展を計らねばならぬ事は自然の成行であるが、故に今後日支親善の實行に對しては先づ以て兩國の經濟提携を實現せねばならぬと思ふのである。

之を要するに帝國民は將來支那國民と親密なる連繫を保持し、懇切に彼等を指導し、東洋の保全を計るに非ざれば從來の如き若干にても、野心を抱藏する如く疑はる、様な事は絶対に之を避くると同時に、眞に日支親善の根本的解決をなす爲には若干の損失は之を忍ぶの斷あるを要すべきである。

特に最近の滿洲事件以來、表面は兎も角も裏面に於ては益々兩國の間に溝が深められて來て居るから、今後に於ては是非兩國の爲に協同の目標を捉へて接近する事が最も必要の件であつて、兩國相反目して居つては東洋の平和は確保出來ざる計りでなく、極東の没落を招く事となるの道理を兩國民に徹底せしめて眞の提携を實現しなくてはならぬのである。

今や民國は北支那及中原地方も漸次赤化の狀勢に導かれある事は實に寒心すべきで、之を擊滅

しなくてはならぬ譯は見易き理であつて、之を協同の目標として進む事は大に兩國の親善を復舊するの基となると思ふのである。

夫の滿洲國の獨立を民國をして承認せしむるにしても、亦此點に關聯して北方より赤色の侵入せざる爲完全なる獨立主權の下に完全なる行政を執行せしめ、以て滿洲に平和郷を建設して内輪より赤色共產黨を引入れる事のない様になると同時に、嚴密なる國境の警視をなして其侵入を防ぐべき防火壁を設くる意味に於て之を承認して日支兩國にて支持して行くべきであると思ふ。

第二節 日支兩國の共存共榮を論じて

兩國の人士に望む

過去に於ては種々なる歴史上の關係と、民國人に對する日本國民の仕向け方に誤解及び不親切なる點があり、且つ時には若干の野心を抱藏せられある如く思はれた事もありて、

特に最近の滿洲事件や上海事件の爲自然排日的氣勢が民國人に高まり來つた事は甚だ遺憾とする所であるが

民國人としても克く最近三四十年間に於て日本國は東洋否民國の爲め如何なる役割をして來たかに就て冷靜なる頭を以て公平に考へて見て貰ひたい。

夫の日露戦争により日本が露國の勢力を滿洲より驅逐したと云ふ事が民國に對し如何なる功績があつたか

若し萬一之を驅逐しなかつたなれば如何なる結果を民國に及ぼしたであらうか、又最近の世界大戰に關聯して日獨戦となり獨國の勢力を山東省より驅逐したと云ふ事が民國に對し如何なる功績があつたか

若し萬一之を驅逐しなかつたならば如何なる結果を持ち來したであらうか

其他民國に對し歐米各國が種々なる難題を持ちかけた際に、日本が居らなかつたならば如何なる結果を結んだであらうかを仔細に考へて見たならば、日本が民國の爲に盡したる事も亦大なるものあるを知るであらう。

現下世界に於ける争覇の戰場は、過去數世紀間に互り開發せられ盡したる歐米にあらずして東洋と南洋及び濠洲と南米と南阿にあるは争ふべからざる事實である。斯くして歐米人は今や世界交通の衝に當れる東洋に先づ其の希望を充さんと企圖しあるは何人も首肯する所であらう。

然り而して東洋の富源は元東洋人の爲めに與へられたる天與の賜にして、之が開發は東洋人自ら之をたすを本則とすべきである。

然るを從來中華國民の爲す所を見るに、只々個人的眼前の小利に没頭し甘んじて白人に左右せられあるもの多く、特に最近蘇國と交通を頻繁にして段々中原地方迄彼等に荒されつゝ、ある事は洵に寒心すべきではないか。

今や日本は總ての點に於て歐米に一步も劣るものではない。然るに同種同文人種にて而も隣接せる日本と提携せずして遠き白人に依頼せんとするものあるは、誤れるの甚しきものではなからうか。

我等兩國は大に協力一致以て極東の平和を確保しなくてはならぬと思ふのである。

日本は民國に對して決して領土的野心を有するものではない事は、最近の滿洲事件以來の行動に依てもよく知れるのであらう。實に共存共榮を希ふものである事は曩に千九百二十一年の華府會議に於ける我が加藤全權の聲明書にも遺憾なく之を物語つて居るではないか。

要するに民國開發の爲には同國は是非日本に信頼すべきであつて、日本も亦根負けせず懇ろに指導すべきであると思ふ。

次に兩國の關係を考へて見るに、日本は恰も民國と云ふ大なる物持の玄關番をして居る様な形であつて、他處の人が此玄關番に何も答ふる所なく、矢鱈に此邸宅に侵入する事は許されない、

強いて侵入せんとせば玄關番は腕力を以て、も撃退して邸宅を防護せなければならぬ。而して此玄關番は相當に腕節も強いのであるから、他處の者共は之を度外視して猥りに邸宅内に侵入する事が出来ない。

縱令二、三連合して來ても之を相手にする丈の用意もあり、又其術も知つて居るから、到庭此玄關番が居つては此物持の邸宅を侵す事が出来ないと云ふ様な譯で、種々列國中に色々な口實を竝べて此玄關番たる日本を中傷して民國と仲割をさせ様と思ふて居る向もあるのである。之れ即ち滿洲事件をきっかけに聯盟諸國が種々なる難題を吹きかけて活動せし所以である事が克明するであらう。

斯く考へて見たならば、日本の存在は正に民國の存立上必要欠くべからざる譯であつて、日本なければ民國は直に列國より侵さるゝに至るべしと云ふても、敢て過言ではないから日本に對し民國は極めて親善の間柄である事は當然でなければならぬのであると同時に、民國も亦日本に對しては其必要なる食料並に各種工業原料の供給をなす事は、當然の義務と認めてよいと思ふのである。

以上の關係より日支兩國は經濟上より云ふても唇齒輔車の間柄であつて、眞に極東の平和を確

保せんとするには兩國民が誠意を以て共存共榮の實を擧げなくてはならぬと思ふのである。

特に近時世界的不景氣の爲各國が自國製産工業の繁榮を計る爲關稅障壁を設けて、外國品を壓迫するに専念努力しあるの今日に於ても、若し眞に日支兩國の親善を實現して兩國間に互惠關稅の設定を得ば我が國は遠く商品を賣り出さずとも、四億以上の得意先を目前に有して居るが故に、何等市場に欠乏を感じざるべく、又工業立國を以て國策とする我が日本に對し、民國は其豊富なる原料を供給するを以て其他の諸國に賣出すの必要もあらざるべく兩國の爲此上なき幸福と云はねばならぬのであると思ふ。

第三節 孫文の抱懐せる日支提携論を噓ふ

孫文先生は民國十三年春に北京中央政府段執政より、善後會議の際北上方の來電ありたる外北方國民軍及び民衆の要請もありたるが故に毅然として北上する事に決心し、愈々多年の理想を實現すべき時至りたりと李烈均戴天仇の兩腹心を隨へ出發したのであつた。

斯くて孫文の考にては北京善後會議に先つて如何せば日華間の時代錯誤の障壁打破を爲し得べきかと云ふ事であつた。

而して國民衆の反對を受けずして、民國自主獨立に絶對的必要なる日本との提携を爲し得る乎、而して列強の不平等條約による壓迫殊に華府會議により定められたる列國の對支機會均等なる鐵柵を除去すべき乎であつた。

斯くて列強の排除により一八四二年の屈辱的南京條約以來國民衆の腦底に泌み渡れる排外思想に點火し、其遼原の火力を利用して民國自主權を確立しなければならぬと思ふた事であつた故に彼は此際日本との提携策如何か凡ての難問題解決の鍵である事を思ひ、今や北上せんとするに當り適當なる此鍵を索さんが爲、他に別段の用向もなかつたのであるが、彼は漂然として春洋丸に搭じて香港より神戸に立寄つたのであつた。然る處我が官憲は孫文が曩に民國統治の形體をロシヤ式に取らんとせし事に對し全く赤露と結托しあるもの、如く誤解しありし爲、神戸より他へ一步も出づる事を得せしめなかつた。

而して又彼自身としても強いて東京や大阪へ行かふともしなかつたが、只一度丈前述の鍵を索めんが爲に日本の地に於て演説をなし、以て日本と提携して不平等條約の打破に關し、相當の後援を求めたかつたのであるけれども、當時に於ける我が朝野の鈍眼はよく之を察知するの明がなかつたので、爲之十分に彼をして満足せしめ得なかつた事は彼に對し頗る氣の毒であつた許りで

なく、實に日華提携の好機會を逸したるは千載の恨事とする所である。

斯くて孫文は神戸の地にて辛ふじて十一月二十四日、高等女學校に於て彼の一生一代の一大獅子吼をなし、次で同二十八日には同じく神戸商工會議所に於て在神一部の人士に向つて日本人に對する希望を述べた丈で終りを告げ大なる收獲もなくして十一月三十日小汽船を特別仕立てにして神戸を出發天津に向つたのであつた。當時著者は現役軍人として此種の政治的意味を有する彼の行動に援助を與へ得ざりしは、深く遺憾とせし處であつた。

彼は天津北京に於て兵力もなく、財力もなかりし身分ではあつたが、熱狂せる大衆の素破らしい歓迎を受けた事は意外であつた、蓋し之れ神戸に於ける彼の演説の反響が然らしめたのであつて、中華國民の孫文先生崇拜熱は日に月に其度を高むるに至つたのであつたが、惜むべし彼は其持病たる膽石が大分大きくなつて居つたのが原因で、翌民國十四年三月十二日を以て其高遠なる日支提携論の實現を見るに先つて永遠の道に旅立つた事は、返すくも残念の極みであると思ふが、茲に彼の神戸に於ける演説を紹介して置くも敢て無益でもなからう。

其の演説は亞細亞主義に就てであつて内容の大意は次の如きものであつた。

今日諸君の熱誠且懇切なる歓迎を感謝致します。而して諸君より與へられたる大亞細亞主義

なる問題に就て今より御話を致さうと思ひますが、其亞細亞とは一體如何なる地方であるかの概念をはつきりしてをかうと思ふのである。私の申す亞細亞とは最も古き文化の發祥地であつて、既に幾千年の以前にあつて非常に高い文化に到達して居つたのであります。

而して歐洲に於けるギリシヤローマの古い文化が總て此亞細亞より傳へられたのであります。吾々亞細亞に於ては古より哲學的文化宗教的文化倫理的文化あり、更に工業的文化もありて而も此等の文化は古來より世界に定評のあつたものであります。

近代世界に顯れたる最新の種々なる文化を検討いたしますのに總て之我々アジアの此種の古い文化の發達成功によらないものはないのであります。

然るにも拘らず近く數百年以來吾々アジア民族は甚しく衰へ果て、しまつたに反して、歐洲の各民族は追々非常に發達した爲歐洲の各國家は段々強盛となり、其餘力を以て我等アジア民族を虐げ來つたのであります。

一度遡りて三十年前のことを考察すれば、吾々アジア大陸には一個の完全なる獨立國家はなかつたと説き得るのであります。物極まれば必ず反す。アジアの衰微は又走つて其極端に立至つたのであります。

然るにこゝに始めて他に其局面展開の一動機が顯はれて來たのであります。其動機とは亞細亞復興の動機であります。

夫は即ち日本が三十年以前に外國との間に結びたる一切の不平等條約を廢除した一端が即ち全亞細亞民族の復興する黎明であつたのであります。

而して日本は亞細亞に於ける唯一の完全なる獨立國家となり面目を一新するに至つたのであります。

斯くて亞細亞の諸國家が此日本の獨立の大業を爲し遂げてからは、將來に大なる希望を持つに至つたのであります。

今より三十年以前の吾々アジア全民族の有様は、全く總ての文化が歐洲人にかなはぬから永久に歐洲の壓迫を脱し得ずして永遠に歐洲人の奴隸たらんとすることに甘んじて居つたのであります。

然るに日本は一切の不平等條約を撤廢し、列強に伍して完全なる獨立自主國家の面目を爲し遂げたのであります。同時に、日本に接近しありたる民族及國家は大に此が影響を受けたけれども未だ全アジアの諸民族及諸國家には波及しなかつたのであります。再び十年を経過し

たる後即ち日露戰爭に於て日本が露國を打ち破つたので、全アジア民族は驚天動地一個の極めで大なる希望を發生するに至つたのであります。

當時私は丁度歐洲に居つたのであります、私の眼に映じたる所の面白き話をして見れば、或る日東郷艦隊が露國バルチック艦隊を撃滅したと云ふ情報が一度歐洲に傳はるや、全歐洲の悲みといふものは恰も父母の喪に會ふが如きものでありました、當時イギリスは日本と同盟國でありながら此情報に對して一同首をかたむけ肩をひそめて思ひらく

「日本が斯くの如き大勝利を得ることは遂には白人種の幸福ではなす」と考へたのであります。

斯の如きはまさしく英國の偶語に現はれて居るところの

Blood is thicker than water.

の觀念であると、ひそかに苦笑を禁じ得なかつたのであります。

然るに其後間もなく歐洲より船に乗つて歸國する途中、スエズの運河にて多數の土人より圍繞せられて彼等より嬉しそうにあなた日本人でありませんかと聞かれたから、私は中國人だが何故そんなに嬉しそうな様子で居るかと問ふたれば

彼等の言ふには、聞く所に依れば日本は今度の日露戰爭に於て歐洲から露國が遙々とまはした艦隊を撃滅したとの事であるが、果して本當ですか、それに私共が毎日運河の兩側に居て皆見て居りますが陸續として一船々に露國の負傷兵が歐洲に運ばれて行くのを見ますに付け、
ても、ロシアは散々に敗北したに違ひないと、ひそかに喜んで居りますと

昔から私達は總て歐洲の壓迫を受けて居たのですが、今度の日本の露國に對する勝利は正に東方民族が西方民族を打ち破る時機が來たのであつて、日本が露國に勝つたと云ふ事は私達が勝つたと同じ事であると大にはしやいで居つたのであります。

之を要するに日本が露國に戰勝してからは、アジア全部の民族が始めて歐洲の壓迫より免れようと思ふに至つたのであります。即ち爾來エチプト、ペルシヤ、トルコ等に獨立運動起り次でアラビヤにも印度にも獨立運動を起す様になつたのであります。

故に日本がロシアに戰勝した結果はアジア民族の獨立運動となりて、僅か二十年の間にエチプトの獨立の成功したる事實、トルコの獨立も亦完全に現はれたる事實、ペルシヤ、アフガンアラビヤの獨立の事實、又中には最近に於ける印度獨立運動の日に日に進展しつゝある事實等凡て之等を綜合して、何と云ふても日本が露國に戰勝したる賜であります。

最近西部アジアの民族は非常な密接なる交際が行はれて居るとの事でありますが、彼等は總て連絡を密にして一大運動を起すに相違ありませんが、アジアの東部に於ては中國と日本とは此種の原動力の發生したる本元でありながら、此點に關する手段方法を認識せず、中國人も貴國日本人と共に其連絡が阻隔しある事は寔に遺憾の事であります。

然しながら將來時勢の赴くところ必ずや中日兩民族は彼我の連絡運動彼我の共同闘争を必然的に展開するでありませう。(以下省略す)

之を要するに孫文の抱懐せる日華提携論は、一時的の御世辭でなく、彼若し在世したらんには當今の如き日華兩國家の疎隔は之を解消するを以て、日華兩國の親善を基礎とする極東平和を具現したであらう。

第四節 日支兩國の親善の基礎は相互に 其國民性を理解するに在り

我が國民は中華民國人に對しても滿洲國人に對しても、丸つきり日本式を以て向ふ爲、其機微の點を捉ふる事が出來ずに、自分の氣に入らざれば直に日本式を以て解決をなさんと試み、其やり方も亦極めて氣みじかであるのと萬事が徹底的に物事を片付けんとするが故に、彼等からは非常に氣持悪しく受取られて、遂に疑の目を以て見られる様になり、夫が原因となり圓滿に凡ての交渉が行かぬ例が之迄尠しとせないのである。

又彼等漢民族は非常に面目(面子)を重んずる民族にして、其點は寧ろ我が國民以上と云ふても敢て過言でないのであるから、苟も彼等と交渉をなすに當りては、必ず先づ彼等の面子を立て、やる様にして其交渉を進める事は何よりも要訣であるから、眞先から彼等の面皮を失する様な事を云ふたり、彼等の耻をかく様な事を仕向けたならば最早其交渉は決して纏まるものでない事を指摘して置きたい。之れ大に我が國民の常に忘れてはならぬ點であると思ふ。

第三章 我が外交に關する所感

第一節 我が國の外交に就て

我が國民は外交と云ふものは凡て外務省がやるものであつて、國民は關係せぬもの、如く考へて居るのではなからうか、其證據には何でも他國に對して事の起つた時には直に外務省に向つて（政府は須らく適當の所置あらん事を望む」と十八番の電報を打つて來るか、在外國民として如何なる要求を持つのやら如何なる考へを持つて居るのやら、一向其意思の所在を知る事なく外務省は單に外務省に在る役人獨自の考を以て、對手國に對して交渉を開始すると云ふのが普通である様に思はるゝ。而して其交渉の仕方が軟弱であれば譯もなく之を排斥し、強硬であれば歡んで居ると云ふのであるが、實に困つたものと思ふ。抑も一國の外交なるものは其國民全體が擔任すべきものであつて、外務省なるものは外交事務を取扱ふ所の役所なのである事を知られたい。某外國人は嘗て予に語つて曰く、貴國の外務省と云ふものは實に偉いものだ、日本には「バブリック・オピニオン」なるものがないのに、外務省はよく外交を處理して行くのは全く我々歐米と違

ふ所であると云ふた事があるが、大に味ふべき話の様に思ふのである。又曰く、日本の近頃の外交は日露戰爭當時に比較して其技能が下つて居りはしないか、其故如何であると検討して見ればこうである。即ち日露戰爭は世界始つてから黄色人種と白色人種との大戰爭の内第二回目の戰爭であつた。（第一回はゲングスカンの歐洲征伐）而して其白色人種の一國でも露國に協力せしめなかつた許りでなく、英國としては日英同盟の爲止を得ざるとするも、米國の如きを戰爭中全然日本に同情せしめたる手際は實に其外交技能の卓越せるものでなくて何であらう。又支那をして其十年前に於ては敵國として戦ひたる國なるに拘らず、而かも其領土内にて戰爭をしたのであるのに彼をして露國に協力せしめずして、却つて日本に對し各種の利便を與へしめたる所の外交技能は如何にも目醒しき手際と云ひ得るであらう。然るに昭和六年九月十八日の滿洲事件突發以來の對支外交は如何であつたか、全く往年のものと比較にならぬ程下手なやり方をして居るではないか、爲之數多の人命を損じ、多大の軍費を消費して居るのではないか、加之世界列國とは仲間放れをして孤立に陥りたる如きは蓋し外交の妙諦をつかんだものとは云ふ事が出来ぬと思ふか如何かと話されたが

此見方も亦まんざら聞き流しにする譯のものでもあるまいと思ふ。而かも聯盟始まつて十數年

其間不用意なる外交工作の爲一小國だも與國たらしめ得ざりしは何たる不甲斐なき事よ、吾人は將來に於て皇國の發展を希圖する爲には、此等外交工作に就て多大の訓練を要する様に思ふと同時に、我が國民たるものは少しく國民外交の眞諦を捉ふる事に努力せなければならぬと思ふ事切なるものがある。

第二節 我が外交官の配置に就て

滿洲事件の惹起せし當時より聯盟脱退に至る迄、我が國民は口ぐせの様に列國は滿洲の認識不足なりと絶叫したのであつたが、果してそうであつたか、我輩をして云はしむれば列國の認識は過重であつて、我が官民等の方が其認識不足ではなかつたか、其故如何を検討して見るに従來我が官民等の考へでは何んでも外交官と云ふものは、歐米各國の事情を克く知つて居つて、佛蘭西語や英語が達者でありさへすればよいかの如く考へて居つた様に思はれる。此故に外交官たる人も亦概ね東洋特に最も我が國に必要な支那事情に暗く其國語の如きは稀に話せる人ある位で、之を稽古しようともしないで、支那にやられる外交官は二等以下の人だ位に思ふて居つたではなからうか、何でも外交官たるものは歐洲大使館就中英、獨、佛、米等にやられるのでなければ

喜ばない様な風であつた事は争ふべからざる事實である。如斯状態であつたから我が對支外交も一向に振はなかつたのは當然の事であると思ふ。抑も我が國の英、米、獨、佛、蘭等に大公使を差遣して日夜交際をして居る所以のものは何の爲か其本國に對してのみ何等か求むる爲許りでなく、英國ならば印度及海峽植民地濠洲ニウゼーランド其他東洋にある英領各植民地に我が國民が自由に往來して便宜を得やすからしむる爲に、其本國と修好を持續する爲である。又佛國ならば佛領印度支那東京安南の如きに日本人が自由に貿易をなしやすからしむる爲に、又和蘭ならばジャバ、スマトラ、セレベス、ボルネオ等に日本人が入込み自由に貿易をなし易からしむる爲に其本國と修好を持續するに努力して居るのであるまいか。此故に和蘭の如きは其本國は小なりと雖も、南洋の領地は大であつて、我が國としては非常に大切なのであるから公使でなく大使を差遣して置く方が適當ではあるまいか。

要するに我が大公使を配置するにも東洋を基礎として、其植民地及び我が國防の關係等を顧慮して之を定むべきではなからうか。従つて支那滿洲の如きには一等の人物を大使として配置すべきであると思ふ。

以上の如くであるから無論歐洲に差遣する大公使及其他の外交官は、凡て東洋の事情を十分知

得せるものを差遣するを立前とすべきである事を知られたい。

第三節 我が國民の外交觀念に就て

茲に我が國民に尙説述したき事があるが、夫は我が國民の外交觀念であるが、恐らく概して誤つて了得せられては居らぬか。予の述ぶる所の外交とは國家間の交を云ふのであるが、大體に於ては個人間の交際と何等原則に於て變る譯のものではないと思ふ。要は當今の外交は須らく誠意を以て親切に公正なる態度で、且つ其間に何等野心を包藏する底の陳腐のやり方ではならぬのである。

故に事に當りて對手國に向つて同情すべき點あらば、先づ充分之に同情を表して置いて然る後に責むべき點をつきとめる様にすると云ふやり方が宜しいのではなからうか。

尙又其交渉に當つては別に辯舌を弄する必要もなければ、或は掛引をなす要もなく又強がりを並べて脅威をする必要もなく、唯底力のある言動を以て對手國をして眞に了解せしむる底のやり方でなければ妙でない。

恰も教育者が威壓を以て學生を教ゆるよりは反覆丁寧に説破して之を了解せしむる底のやり方

でなければならぬ。徒に辯舌を弄し或は威丈高になつて高聲を發して喧嘩腰になつて對手國を脅がしたり、或は對手國を罵倒したりして以て其感情を激發したりするが如きは、外交の妙諦を知らぬもの、やり方と云はねばならぬが

我國民中には往々誤つた考への下に外交と云ふものは矢鱈に強がりを云ふて對手國を威壓するを以て得たり賢しとなし、之を以て自主的外交なりと痛快がつて居るものあるを聞知するが、此等は寔に過つた考へと云はねばならぬ。

蓋し個人間の交際では假へ無茶苦茶をやつて痛快を叫んでも大した事はないが、國家間の事件に就ては之が折衝に痛快を得んが爲に不謹慎なる言動をなすが如きは大に誤つた事であつて、個人の生命は短くとも敢て差支はないが、國家の生命は長くなければならぬのである。國家を痛快や壯快の道具にして貰つては甚だ迷惑千萬の事と云はねばならぬ。宜しく此間の道理を充分に了得して貰はねばならぬのである。

以上の如く説き來れば何だか意氣地なしの如く見る人もあらんもそうではない、黙つて柔かにして笑つて居つても、いざと云ふ時には山をも崩す底の膽力が据つての事ではなければならぬ。徒に繞舌を弄したり強がりを並べても龍頭蛇尾に終るのでは笑止千萬の極と云はねばならぬ。

夫の時と場所とを考なしに輕々しき言論を吐いたり、或は單に人氣取り策に没頭し喋らすともよい事を口走つたりして、國家國民の迷惑を感じる様な事をするのは非常時日本に於て此際大に慎むべきではなからうか。

第四節 我が國民の外交的訓練に就て

左の一編は往某外交當局者の述べられたる所にして、現下我が國民の爲有益なる教訓と信じ之を茲に掲載して聊か讀者諸君の参考に供するものである。

自國の利益とか名譽とか云ふ口實の下に漫りに他國を排斥し脅威し、又陥穽するを以て外交の能事なりと心得従つて權謀術數は外交に必須の手段であるが如くに考へられた時代は幸にして過ぎ去つた。而して今日は國際正義とか互讓と寛容とか協調と云ふやうな精神が段々外交上に重んぜられるやうに進歩して居る。是れ政治は民意民權と云ふ合理的基礎の上に行はねばならぬとする近代政治思想の發達に伴ふ當然の結果にして、所謂政治の民衆化か否か更に適切に言へば民衆の政治的自覺が齎した一つの福音と看做すべきであらう。

然し權利は義務を離れて存在し難きが如く今日國民の國家に參與する範圍、即ち國政を支配す

る勢力が増せば増す程各國の一般人民が内治及外交上の智識訓練を養ふことが必要になつて來る然るに内治の事柄は一通り心得て居るが、外交の事になると程度の差こそあれ何れの國民も智識訓練が足りないので面倒が多い。昔時外交官が宮廷や一部少數の特權階級に依りて支配されて居つた時代は、一般人民の安寧幸福が屢々誤れる愛國心や個人的野心の犠牲に供せられたのだが、其代り民衆の外交に對する責任もなかつた。然し今日の外交は國民の實生活を基礎とする國政の重要な一部分であつて、參政権を有する國民としては其責任を分擔せねばならぬのである。

蓋し今の時世に在りては何國の政治と雖其國民大多數の熱心なる後援を確保することなしに戰爭を始むるものはあるまいか、事に當り變に際し動もすれば激昂する民心の壓迫に遭ふては政府も其意に反しながら戰爭の渦中に引込まれることは時として有り得るのであるし、又所謂人氣取りを慣用手段とする現代の民衆政治に於ては政權慾に焦せる政黨や、不謹慎なる政治家が當面一時の便宜的考慮よりして危険極まる外交的投機を試むることも往々あるし、或は又國と國との間に爭議の發生したる場合、而して今日の國際關係に於ては商業の發達と共に商事裁判事件の發生が多くなると同様に國際爭議の發生も亦少くないのである。而して關係兩國政府當局は誠心誠意互讓寛容の精神を以て其平和的解決に苦心努力しつゝ、あるに拘らず、兩國民衆の多數は雷同的に

偏狹なる敵愾心につられ互に強固なる反抗的態度を露出し、極端なる自我的主義を固執高唱して問題の妥結を至難ならしむる事は珍らしくないので、此間國民は直接間接に莫大の損害を被るのである。斯の如きは概ね一般國民の外交的智識訓練の足らざるより生ずる結果であつて、一國外交の衝に當る政治家の責任は固より重大であるが、其政治家を動かす勢力を有する國民も亦其責を分たない譯には行かぬ。

思ふに凡ゆる政治上の計畫施設方便が民衆の批判に曝され、而も其民衆は往々にして多く不見識であり、従つて不謹慎無責任なる職業政治家の忌はしき技巧に捕はれ、又は誘惑され易い方今の時世にありては外交上の賢明なる施設をなし、又は國際爭議の平和的解決を企圖するに當りて當局者の遭遇する重なる障碍の一に、該當局者が自國民の極端なる要求主張の幾部分なりとか譲歩するか、若くは相手國の主張や立場に道理ある場合、潔く之を容認するが如きことあらむか、當局者は曾て當該事件又は事情の真相を審にすることを力めもせず濫りに自國側の主張や立場のみに偏倚せむとする國民の多數から、痛烈に非難さる、場合が多いと云ふ事實に存するのであるまいか。而も今日の國際問題は關係國一方の主張や便宜のみにより決せらる、様のもものは、殆んど無い。多くは相手國方の讓歩と節調と理解とに依りて協定、若くは解決せらる、のである。夫

で凡そ國際紛争は之を平和的に解決するが最善であるは申す迄もないから、そうするのに須要の條件は一般國民が條理を重んずること、即ちリソネブルであると云ふ事と温良の氣分を保持して居ると云ふことであつて、換言すれば事實は事實として之を認め自國側に有利なる議論も亦不利なる主張と同じ心持を以て冷靜に之を較量計量するの雅量を以て各國民が當該問題に臨み、其代表者なる外交當局の之に對する施措の當否を公平に判斷すると云ふ事が大切である。

以上の如き願はしき事態の發生を促す一つの途は、一般國民の外交的智識訓練を涵養するにある。一國の人民が其國際的權利を明確に了解すればする程其權利の濫用や、之に對する不道理の主張を慎むこととなり、一國の人民が其國の負へる國際的義務の如何なるものかを多く會得すればする程右義務の履行に對する他國の正當なる要求を憤るの念が減じ、一國人民が世界の平和保持に必要なりとして人類の長き經驗が教へたる各國民間の自制協調及禮讓の習慣や、規則に習熟すればする程他國との係争事件や、商議事項を論議するに當り、濫りに相手方の感情を害したり自國の信義を傷けたりして事件の妥結や、協商の成立を困難ならしむるやうな言動を慎むの傾きが増してくるし又一國民が外國の歴史や、民情に通ずれば通ずる程之に對する同情的理解が進み敵意や毛嫌ひの念が減るのである、

今日何れの文明社會に於ても個人の權利義務を裁定する爲に、裁判所を有し法律に對する服従を強制する爲に役人を有することは必要であるが、而も社會の安寧秩序の眞の基礎をなす所のもは警察官や裁判官に對する吾人の恐怖心にあらずして、其社會を構成する民衆の自制心と其法律を遵奉し他人の權利を尊重せんとする自由意志に存するものであるが如く、國際平和の基礎は一國の他國に對する恐怖心に存せずして、自主獨立の各國民間に於ける公正寛容の精神、即ち自國の權利を擁護すると同時に、他國の權利をも尊重せしめんとする念慮と國際爭議の因をなす諸問題を取扱ふに當り、常に公平であり、親切でありたいと云ふ希望に存するのであつて、今日の國際現實が示す忌はしき半面のみを見て、直に武力に依らずんば眞に國際の平和を確保するの途なしなど、思ふは、餘りに舊時代の思想に拘はつた考へと云はねばならぬ。

抑も一國の外交政策は其國民の實生活の所要に應じて樹立せらるべきものであるから、國々に依りて其の政策の異なるものあるは當然なるも、其異なるが爲に必然衝突が起ると考ふるは誤りである。國際的智識訓練の圓滿に發達せる兩國民間には、好意的和解の道なき様な問題は起らぬものと觀するのが寧ろ健全なる思想である。右の思想は凡そ一國の其の利益及び名譽にして他國の名譽利益を適當に尊重すること、相容る、能はざるが如きものは有り得ないとする。近世進歩せる

國際正義觀に基くものであつて、今日各國に於て往々誤れる外交政策が採用せられ、不穩當不條理なる對外行動が演ぜらるゝは、主として叙上の國際正義觀に對する國民の理解が十分ならざるに因るのである。

論者或は曰く、今日の輿論政治議會政治には殆んど固有と見得べき一の短所がある。其は所謂民衆の輿論なるもの、往々にして淺薄であり、我儘勝手であり、無責任であり、短氣であり、而して變り易きものであると云ふ事である。それで内政上に於ては斯る輿論の爲に政府や議會が時に過ちや失策を演じて、之が是正に困難面倒は比較的小さい場合が多いのであるが、外交關係に於ては一たび惹起したる過ちや失策は之を改め直す事が却々容易でない場合が頗る多いので、危險であるから外交は輿論の圈外に超然たらしむる必要があると。

斯の説明は各國民の實驗上一應の理由あることは否み難いが、然りとて國民全般の利害休戚に關する重大の政策や、問題を單に事外交に屬すと云ふ理由のみにて國民に考慮の機會を與ふることなしに決することは、今日の時世に於ては許されない事で、少くとも外交上の大方針や新政策を決定するに當りては内政問題の場合と同様に、國民に賛否を表するの機會を與ふべきであると思ふ。成程何れの國に於ても民衆の輿論は外交問題に關しては、内政問題の場合に於けるよりも

更に、煽動挑發に應じ易く、從て危險性も多いのであるが、同時にまた指導啓發宜しきを失はず假すに時を以てするに於ては案外公平であり、堅實であると云ふことも各國の歴史上肯認せねばならぬ事實である。假へば今日の佛國民は「ルイナポレオン」の企てたる墨國遠征や對普戰爭は是認しないし、今日の英國國民は鴉片戰爭や次で起れる第二回の對清戰爭を是認しないし、南阿戰爭も英國の失策なりと認むるものが多いやうであり、又米國に於ては往年の墨國戰爭は當時既に國論の指彈を招きし所であり、米西戰爭に關しても今日の米國民中には其の正當を疑ふ者が少くないやうである。此等の事實は何れも進歩せる國民は常に自己の利害を正當に識別するの明を有するのみならず結局正義の前には、叩頭せずには居られないものであると云ふ眞理を語るものではあるまいか。それで假へ多少の危險はあるとしても、外交上重要な政策や問題を決するに當りては篤と之を國民に諮りて豫め其理解を求むるのが、今日の政治家の力むべき事ではあるまいか。尤も一度定められたる方針や政策を遂行し、活用するに就ては勿論又斷えず發生する所の各種國際案件の處理裁斷に就ても内政の場合とは異り、廣汎なる自由裁量の餘地を訓練せられたる外交當局者の手に委するの必要なるは固よりである。

要之近世外交の要は他國民の信頼と好意を博するに在る特に我國の如く、國民の實生活上の要

所を充たすに就ては他國の友好的協力に俟つ所大なる國にありては、最も然りである。其れには偏狹なる排他心や無智の己惚れや頑迷なる利己主義は大禁物である。謙讓の誠親愛の情が個人の品位威嚴を損するものでなく、却つて他の尊信敬愛を招く所以であり、而して斯の尊信敬愛を博する事に依りて始めて自國の正當なる利益を最も有利に伸張する事が出來得るのである。徒らに自主的外交などと紙の上で口頭で威張り散らして見た所で、自分の内を整ふる事も出來ず、國際上尋常普通の義務すらも果す事が出來ないと云ふ様な始末では、世界の不信輕侮を招くのみで眞に國運の發展に利するが如きは到底期し得べくもないのである。前にも述べたる通り政府當局の外交に關する責任の重大なるは言ふ迄もないが、今日の世界に於ては國民と國民との接觸が益々密接に、而して複雑繁劇になつてくる上に其國民の國論が結局其國の外交政策を支配することになるのだから、一般國民が外交に關し健全なる理解を有し斯の理解に依り、其不斷の行動を規律して行く習慣を養ふことが極めて大切であると思ふ。

第四章 我が國防に關する所感

第一節 海軍比率問題に就て

抑も千九百二十一年の華府會議に於ける海軍比率問題を検討して見るならば、餘程妙な感じがするでなからうか。夫はどちらかと云ふて見れば、本來各獨立國家間に海軍の勢力比率を定むると云ふが如き事は全く國防の原則を没却せるものであつて、斯の如き非常識極まる事がある筈のものでない。

古來どこに一國が他國に對し貴國の軍備は過重である我が國の何割でよろしいと正札をつけられて成程夫でよからうと協定したためしがあるか。

又曰く、我國の某島は防備をなすけれども貴國の某島は防備をなすべからずと強ひられ、成程夫でよからうと協定したためしがあるか。

要するに國防と云ふものは其國の四圍の狀勢と國力とに應じて、自己の安全なりと信する迄強力にするのが原則であつて、決して他國より彼是指圖せらるべき筋合のものでないのである。假

へ國家の財政が苦しからうとも背に腹は代へられんのである事を指摘して置きたい。之れ蓋し今回の倫敦會議に於て我が全權が敢然として前回の如き拘束的比率而も屈辱的なる協定には決して應じなかつたものと思ふのである。

第二節 我が陸軍の兵力に就て

我國策の根本方針は日滿支三國の親善を實現して極東の平和を確保し、歐米列國に對しては常に政略を以て平和を維持するに最善の努力を拂ふべきにあるけれども、萬止を得ざるに當りては戰爭を以て平和を克復せざるべからざるが故に、其軍備は最悪の場合即ち英米軍並に蘇支兩國軍を向ふに廻して戦ふ時を顧慮して心算する豫想敵軍と、其均衡を失せざるの限度に於て之が整備を期せなければならぬのである。果して然りとせば我陸軍の兵力は頗る多數を要する譯となるのであるけれども、予の見る處を以てせば其作戰區域は頗る廣範圍に亘るも、我國軍の價值と組織と極東の地勢とは假へ最悪の場合に於ても敢て恐るゝ程でない事を指摘して置きたい、而して其理由の一として次節を熟讀せられたならば克明するであらう。

第三節 歐米軍が我領土若くは滿洲國に**上陸作戰を企圖し得るや**

米國西海岸より我が本土迄五千五百海哩、滿洲國迄六千六百海哩の航程を戰鬪力を完全に保有せしめて軍隊を輸送せんには、壹個師團に對して六千噸以上、船舶總噸數約參拾六萬噸を要するは、往年の日露戰役に於て平均壹千壹百海哩の海上輸送が壹個師團に對し總噸數約拾貳萬噸を要したる事を基準として計算せば之を知る事が出来るのである。委しく言へば太平洋を横ぎりて軍隊輸送をなすべき船舶は少くも六千噸級以上ならざるべからずして、之に對し石炭の四十分分片道二十五日分と豫備炭二週間分を合して、即ち約貳千噸清水の四十分分（石炭と同様として）約八百噸糧食の四十分分（炭水と同様として）上陸直後の糧食等を合して約六百噸を積載せざるべからざるが故に、其餘積は全船積の約二分の一以下に減せられるのみならず、長時日間の航海なれば人馬の戰鬪力を維持する爲には配船を努めて廣濶ならしむるを要するにより總括して、船積の三分の一より以上は軍隊の人馬材料に配當するを得ざるべし。

而して上陸作戰に於ては上陸軍は其上陸地附近に於て對抗すべき敵軍の三倍より以上の優勢に非れば成功し難しとは古來不變の原則なれば、當分我國土並に滿洲國に於て敵の豫想上陸地に對

して直に少くも壹個師團半位の兵力を集中するは、敢て難事とせざるの狀勢に於けるが故に上陸作戰軍としては少くも四個師團半の兵力を同時に上陸せしめ得ざるべからずして、如斯海岸は我領土並に滿洲國に於て之を求むる事能はざるを知るであらう。從て目今にては米陸軍等の我が領土並に滿洲國に上陸作戰を企圖する事は一場の夢物語と見るの外なく、況んや歐洲軍に於てをやである。

第四節 我が海軍力に就て

我海軍に於ては第一節に述べたる如く、今や華府海軍會議の比率問題の如きは一蹴せる外我には列國海軍の所有せざる優秀なる各種の戰鬪能力を有し、且つ特殊なる計畫をも有しあるものと想察せらるゝが故に吾人は往年對馬水道の大會戰に大勝利を獲得したる時の如き事あると豫想するものである。

第五節 我が空軍の擴張にて就て

前述の如き我が陸海軍に就ては既定の計畫を遂行せば敢て列國軍に對し遜色なきものと認め得

るけれども

獨り我が空軍の整備擴張就中戰時航空要員の補充機關たるべき民間航空學校の整備新設に關しては現時非常時日本に於て最も重大視せらるべき事項としなければならぬのであるが、故に吾人は何はさて置き大馬力をかけて各要地に速に飛行學校と、飛行場とを設備するの準備を完了しなければならぬのである。

委しく云ふて見れば列國連合の空軍特に〇〇〇の極東に對する空軍の大集團を向ふに廻して、空中戰に優勝の地位を占めんとせば、少くも〇千以上の戰鬥機を以て敵空軍を驅逐しなければならぬのであつて、一機たりとも爆撃機をして我が國土の上空に侵入せしめんが、其受くる慘禍は甚大にして我が大都市を〇土に化せしめらるゝのであると思ふ。時眞に膺に粟を生せざるを得ないのである。

果して然りとせば現下に於ける我が空軍の勢力の大擴張こそは眼前に迫りつゝ、ある所の最大急務にして、就中夫の航空要員の減耗率が世界大戰の際に於て毎月貳割乃至五割なりしを思ふの時、目下に於ける我が民間航空要員の少き事は寔に寒心に堪へん次第なるを絶叫せざるを得ない譯である事が克明するであらうと同時に、大に之が養成に努力し以て極東の平和を確保すべき重大な

る責務を有する我國空軍の整備を期せなければならぬのであると思ふ。

第六節 戰時航空要員養成機關設備に關する私案

現況に於ては平時數多の飛行學校を設置して數多の飛行士、若しくは機關士を養成するも之を就職せしむるの道なきに依り、止むなく平時に於ては戰時急設増加せらるべき數多の飛行學校の基幹たり得べき完全なる飛行學校を各師團所在地に各壹個宛完備して戰時に於て夫の常設師團を基幹として〇〇〇〇を編成するが如く、師管内の適當なる地に飛行場並に飛行學校を急設して少くも戰時に於て毎校毎月六拾名の飛行士と六拾名の機關士を卒業せしめ得る如く、全國に少くも各道府縣（朝鮮臺灣を除く）に各壹校宛新設せらるゝ如く、動員計畫的に平時より詳密なる計畫を立案せられありて戰時の要求を充たす如くならざるべからずと思考するものにして、世界戰の際英本國に於て六十四校の飛行學校が設立せられありて、毎校毎月六十人宛の飛行士及殆んど同數の機關士を六ヶ月にて卒業せしめたる後之を訓練して戰線に補充したる適例を参照して、大に之が遺憾なき計畫を立案すべきであると思ふものである。

第七節 我が軍資は各國軍を向ふに廻して
數年間戦争し得るや

我國は今や其國防線は大陸に擴張せられ、且つ滿洲國とは防守同盟を締結しあるにより往年に於ける日露の戦争時とは大に其趣を異にするに至りたるは寔に喜ぶべき事であつて、當今滿洲國の侵々として開發せらるゝに至りたるは、正に我國に自給自足の道を開きたるに等しきものにして之天の正義なる我國に與へられたる賜物とせなければならぬのであつて、滿洲に於て生産する夥しき雜穀と朝鮮産米とは往年の世界大戰に於ける獨國の二の舞を演ずる如き事は、決してなきものと斷ずる事を得るのである。特に我が軍の最も歐米諸國軍に優れるは梅干と「むすび」とを以て長時日間其體力を維持し得るにある事であつて、彼等には肉食を要するも吾等は乾魚若くは鹽魚を以て足るのである。又作戦資材製作に要する鐵材の如きも、重油の如きも生産費に顧慮する事なれば辛ふじて自給自足をなし得るの原料を有するに至りたるは國軍の最も強みを感じる所である。其他火藥原料たるべき綿の如き國內を漁れば、其量決して乏しとなさぬから平素作戦準備の爲遺憾なき資源局の活動と相俟つて、今や辛ふじて戦時の要求を滿し得るものと信ずるに至つたのであると思ふ。

第八節 我が国防と滿洲國三千萬民衆の向背

今や我が國防線の大略に擴張せられ、而かも日滿協同防衛條約の存する限り滿洲三千萬民衆を抱擁し得ると否とは、正に我が國防を全ふし得ると否とに重大なる關係を有する事を忘るべからず。従つて我が官民たるもの慎重に考慮する所なかるべからざるなり。

昭和十二年四月十日印刷
昭和十二年四月十五日發行

著者 鈴木一馬

東京市澁谷區惠比壽通一ノ二九番地

發行者 中津與之吉

東京市澁谷區角筈二丁目六五番地

印刷者 松山長治郎

東京市澁谷區角筈二丁目六四番地

印刷所 八千代社印刷所

發行所 東京市澁谷區惠比壽通一ノ二九 東邦事情研究書院

終

2
18
1885